

入生の参加が多く、外国人児童生徒問題に興味を示す学生がますます増えていることを実感しました。

発表者1人目の加藤ジオランデル君は、フィリピンにルーツを持つ学生で、親の仕事をきっかけに、7歳の時に来日しました。日本の小中高で学業を修め、現在は、大学の長期休暇を利用して、母語の習得にも積極的に取り組んでいます。2人目の若林由美さんは中国朝鮮族にルーツを持つ学生で、小学校から高校2年生の1月まで、中国で生活していました。日本へ来日後すぐに高校を受験し、本格的に日本語を習得しています。3番目の発表者は、帰国子女である堀部聖人君です。香港で幼稚園から小学校3年生まで日本人学校で過ごし、小学校4年から中学1年生の終わりまでインターナショナルスクールに在籍していました。その後日本の中学校、高校へと進学後、現在に至ります。

3名には、日本でどのような壁を乗り越え、逆境に立ち向かっているかなどについて話をして頂きました。3名とも異なる背景を持っているため、それぞれから得たメッセージを一言ずつ述べたいと思います。加藤ジオランデル君の発表では、自分のルーツを忘れることは孤独に走ることになるという発言が印象に残っています。若林由美さんの場合は、言語的な壁よりも生活面での壁が大きく影響してい

る話を聞き、外国人児童生徒は社会的・文化的な問題を同時に抱え、様々な葛藤を乗り越えるために日本人の友人や先生の支えが重要であることを改めて感じました。そして、堀部聖人君の「自分がされて嫌だったことを忘れるな」というメッセージがとても印象的でした。

今回の発表者のように大学進学を実現している外国人児童生徒がいる中で、来日した時期、年齢、環境などの違いで、高校進学の壁にぶつかる外国人児童生徒が多くいます。本来持っている能力よりも日本語能力で進学先が決まってしまうといった実態があります。子どもたちに平等な教育機会が与えられるためには、かれらの言葉を一つ一つ拾っていき、問題を問題のままにしておくのではなく、解決の過程に進まなければなりません。そのために私たち学生に出来ることは何かを模索し、外国人児童生徒の現状を皆様に伝える活動を続けていきたいです。また、フォーラムでの話が会場に来てくださった方々の心の中で止まるのではなく、発信していく人が一人でも多くなればと思います。

最後になりましたが、HANDS 学生実行委員会の仲間、忙しい合間をぬって協力して下さった先生方やボランティアとして協力してくれた学生の方々など、たくさんの方に感謝申し上げます。

学生実行委員会メンバー：海野杉江（国際4年）、キム・ダヘ（国際4年）、小林佑馬（国際4年）、中瀬淳（国際4年）、岩村恵（国際3年）、曾徳機（国際3年）、ブラボ ホセ（国際3年）、村里杏子（国際2年）、丹治真奈（国際1年）、仲間美稀（国際1年）、山下和弘（国際1年）、荒井絵理菜（国際1年）、大和優希（国際1年）、金森夏実（国際1年）

第2部 3年間の HANDS プロジェクトの成果と課題

司会:松本 敏(教育学部教授)

①外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣事業について

- ・事業説明及びアンケート調査結果報告（辻猛司スクールサポートセンターコーディネーター）
- ・派遣先校より：宇賀神玲子（宇都宮市立陽東小学校教諭）
那花幸子（益子町立益子中学校教諭）
- ・HANDS プロジェクトより：若林秀樹（国際学部特任准教授）

HANDS プロジェクトでは、外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣事業を行っております。まず、その概要とアンケート結果から見えて

き課題などについて、辻猛司コーディネーターより説明がありました。

辻：本事業は、今年で3年目になりました。派遣実績は毎年増えています。本年度は39名登録、依頼件数が18件、派遣延べ人数が38名。初年度に比べて倍増といえます。

次に、アンケートです。過去3年間、学生を派遣していたところに、アンケート用紙を配布しました。昨年11月に実施し、18校にお願いし、17校から回答をいただきました。

そのアンケートからは、派遣先校からの回答で「満足」が多かったこと、本事業に対して期待すること一番多かったのが、長時間の支援活動であること、「距離的に離れているので無理だと思う」と思って派遣依頼を躊躇する学校が少なくないということがわかりました。派遣依頼に対して、答えられない学校は3校ありました。それは、学生に呼びかけてはいるものの、ちょっと遠くて交通の便があまり良くないようなところへは、難しいようでした。申し訳ない気持ちでいっぱいです。

成果については、アンケートにあったように、学ボラ派遣による支援事業が各学校や教育委員会にとって大変役だつものであったというのは、正直嬉しかったし、それが第1番目の成果だと言えます。2番目としては、学生自身の意識の高まりです。課題として考えられるのは、「PR不足」。どんな支援ができるのか、もっと具体性を持って案内を書く必要を感じます。2つめの課題としては、いろいろな派遣内容に答えられるように、もっと我々が人材を増やす、登録者数を増やす、堪能な言語を持った学生をたくさん確保する、そういうことが可能であれば、派遣依頼に対応できるかなと思います。

次に、その学生ボランティアを実際に受け入れた派遣先校から、二人の先生をお招きし、実情や成果などをお話いただきました。まず、宇都宮市立陽東小学校教務主任の宇賀神玲子先生です。

宇賀神：3年の終わりに中国から来た男の子がいました。3年生ですので、かけ算は出きるだろうと、日本の感覚で、かけ算の指導をしましたが、「わからない」様子。「なんでかな?」と思い、いろいろ試していったが、私にはわからなかったので、困ったな、と思っているところで、この事業のことを思

い出しました。早速一人の女子学生を派遣してくれました。その方に、「かけ算がうまく伝わらないんだけど、どうしてなんだろう。」と聞いたときに、日本では、「ろっく」も「く・ろく」もかけ算九九として教えるんですが、中国は、その半分、「ろっく」は教えるが、「く・ろく」はやらない、ということをしてその学生から教えていただきました。それを私は一生懸命、「く・ろくは?」と聞いていたわけですが。「あ、そうだったんだ!」と、私は、一番そのことが申し訳なかったなと思いました。

それから、その子が困っているんだろうなって思った点は、その子は非常に明るくて、良い子なんですけれども、なかなか友だちに声がかけれないということでした。そりゃ、かけられない。私も外国の方がいて、遊びたいなって思っても、なかなか英語でべらべらってわけにはいきませんので、同じなのはよくわかったんですけども、なかなか友だちに声をかけられない彼に掛ける言葉が私も見つかりませんでした。でも、その中国の子の本当に伝えたい気持ちっていうのを日本語では彼は私に伝えることができないでいました。でも、学生さんが来てくれたおかげで、「多分ね、〇〇君は言いたいことがたくさんあると思うんだよね。でも、私に言えないでいるんだよ。ちょっと聞いてくれる?」と言いました。その学生さんが、いろいろ話をしてくれました。その子は、私には言ったことがないような口調で、中国語でべらべらっと、その学生さんと話をしていて、その中身を学生さんが私に伝えてくれました。言えないでいるその男の子とつないでくれた学生さんにありがたく思いました。今もその学生さんはきてくれていて、その子と兄弟のように接してくれていて、その子も、その学生さんが来ると、非常に安心した笑顔を見せてくれていますし、担任も「このことをちょっと説明してくれませんか?」と言うと、それを伝えることが出きるので、担任も安心できます。もう一人、ブラジルの子については、本年度も別の学生さんが来てくださっていたのですが、お願いしたかったのですが、時間割との関係で、どうしても学生さんも授業がありますし、こちらの時間割も動かせられないので、5・6年になると、出授業というものが有り、担任以外の先生が絡んで時間割を組むようになってしまうと、学校内

のことであっても時間割を自由に動かせられないので、時間が取れないということがありました。ただ、私が思うには、せっかくの機会なので、そこは何とかして、学生さんにも来てもらえるようにしたかったんですけれども、どうしても無理だったというところで、その方にも申し訳なく思っています。今、学校は、PTA、企業、スクールサポートセンターのような大学、いろんな方が、学校を助けてくれようという機運が感じられるようになっていきます。私もできるだけいろんな方の支援を学校に入れたいと考えています。どんな支援を受けられるか、いつも周りを見渡して、どんな支援をどこでしてくれるんだろうと探しています。新しいものを入れようとするときには、やはり先ほどのアンケートにありましたとおり、こういうときはどうなんだろう、どうなんだろう、どうなんだろうっていつているうちに、何となく派遣の実現に至らないでしまっているという学校も実際にはあるんだろうと思います。

学生さんのみなさんに感謝し、大変ありがたく思っている者の代表としてお話をさせていただきました。

次に、益子町立益子中学校の那花幸子教諭からお話いただきました。

那花: 中国籍の生徒が、中学1年生の夏休みの終わりに他県から転校してまいりました。生徒は日常生活には困らない程度の会話は理解しておりました。困ったことはさほどなく溶け込みました。本人は、明るくて前向きな人柄のせいもあり、生活にも困らなかったのですが、栃木県立高校入試の外国人等の特別な措置で受検することができないとい

うのがわかったときに、本人や保護者とも話をし、できれば栃木県立の高等学校に進学したいという強い希望を最初から持っていましたので、できるだけ学習支援をしていこうと考え、では一体どういう支援の方法があるかと考えておりました。

そうしたところ、HANDS プロジェクトの案内が学校に来まして、これを利用するのはどうだろうと、宇都宮大学に連絡し、中国語が堪能な学生さんをすぐ派遣していただきました。

益子町は宇都宮大学から、学生さんが来るのには非常に交通の便の悪いところでして、バスを利用して小1時間かかるところです。バス利用でかなりの時間や費用がかかります。宇都宮大学で交通費も負担してくれるということで、スムーズに話が進みまして、派遣に至りました。最初の学生さんが卒業された後、次の学生さんへのバトンタッチの方も円滑で、間を途切れることなく学習支援をしていただけました。

生徒への支援の内容は、その生徒の日本語能力や学習習得状況等を見ながら、学年があがるごとに、支援の重点を日本語習得から学習支援にシフトし支援しました。お陰様で、本人のがんばりもあったかと思いますが、今、中学3年生になり、受検の時期に入り、成績も少しずつ少しずつ上がってきてまして、なんとか3月の入試を受検できるような基礎学力が身についてきたかな、というふうに私は思っております。

学生ボランティアにサポートしていただきまして、子どもの持っている力、のびしろをのばすサポートをボランティアで長期にわたりしていただきまして、本当に感謝をしております。

② HANDS プロジェクト外の成果・課題・展望

パネリスト：川口直巳（愛知教育大学助教、研究分野：日本語教育学、外国人児童生徒の教科学習理解）

金本節子（茨城大学教授、研究分野：日本語教育、異文化コミュニケーション）

HANDS プロジェクト全体について、学外から2人の有識者をお招きし、評価を受けました。まずは、茨城大学教授の金本節子先生です。

金本: まず、横の広がりがすばらしい。これは、私がいろいろと情報を集めてまいりましたときに、ど

こからも聞かれたことです。大学と教育委員会が連携してネットワーク化されているのは夢のような話で、こんなことは全国でも珍しいのではないか、というコメントをあちこちで聞きました。

学生たちの参加ができていうこと、これがやはりすばらしい。実は、大学の中で、異文化コミュ

ニケーションや多文化教育などというような授業を担当していても、大学生の意識というものがなかなか変わっていかないものだというを日々実感しています。これは、大学に入ってから、いきなりそういう教育がはじまってもなかなか成果が出にくいものだと思います。

そして、金本先生からは、茨城県の国際課や義務教育課での取り組み、3年前から開設された茨城県外国人就労・就学サポートセンターの支援内容等の紹介もいただきました。また、茨城県内では3年前までは4つあったブラジル人学校が、リーマンショック等の影響や地震の影響もあって、今2つになろうとしている情報も伝えられました。

金本先生は、最後に「欧米などの状況を見ますと、多文化化は進んでいて、先進国としていろんな取り組みも行われていますが、実際に、学校の現場、地域社会の現場を見ると、共生って言うことはいかに難しいものなのかな、ということに非常に感じています。一緒に考えて、地域住民として地域作りをする、その意味でこの取り組みがさらに発展して、共生という形を着実に築いていただけたらありがたいな」と本プロジェクトへの期待を込められました。

二人目は、愛知教育大学助教の川口直巳先生です。

川口：愛知県には、製造業が盛んなことから、外国人労働者が多く就業し、そのため、外国人児童生徒数も全国1位となっております。愛知教育大学には、外国人児童生徒支援リソースルームがあります。ここでは、いろいろな取り組みがされています。

現在、近隣の4市、刈谷市、知立市、豊田市、豊明市の教育委員会と覚え書きを交わしまして、財政的な支援を受けることができ、協力体制を築いています。昨年からは、文科省の特別経費プロジェクトで、外国人児童生徒を軸とした多文化共生社会を目指す教育支援の構築というプロジェクトを行っています。3年間の計画で、今年が2年目になります。

学生ボランティアによる小中学校での学習支援を中心に今日はお話しさせていただきます。登録者が、11月末日の段階で、183名います。現在派遣校は、28校です。学生派遣数は、90名となっております。

学習支援の形態といたしましては、個別派遣と集団派遣があります。個別派遣というのは、各小中学校で取り出し支援と入り込み支援を個別にしているケースです。集団派遣というのは、2校あるんですが、外国人の子どもたちが多い小学校に、マイクロバスやタクシーで学生を連れて行ってクラスで教えるという集団派遣です。

本学は、教員養成の大学で、将来教員になるであろう大学生たちが、学生のうちから外国人児童生徒の問題点を理解して、教員になっていくことが、支援の一番の近道ではないかということで、覚え書きを提携するときも教育委員会のご理解を得ています。学生の自主的な活動を促すということで、常に何をどのように教えるのかは、学生が主体になって、リソースルームはサポートするという形をとっております。

学生は、まじめな学生ほど、自分の支援が合っているんだろうか、自分のやっていることが本当に子どもたちの役に立っているんだろうかだとか、高校入試にこれがつながるんだろうか、と非常に悩んでいます。ですから、できたら、派遣先の担任の先生と連携をとっていけたら、というのをリソースルームでは目指しています。

集団支援は、だいたい15回で終わりますが、学生の中には、初めて支援に行ったときには、外国人児童生徒達の口調がきつくてぼろぼろって涙を流してしまう学生もいます。でも、15回たちますと非常に対応の仕方も上手になっていて、感想もすごく良いことを言ってくれるというように、学生自身の成長にもつながっているんだなあ、と思います。

宇都宮大学 HANDS プロジェクトでは、県全体として、各市につながりを求めて活動されています。私たちは、愛知教育大学リソースルームと覚え書きを交わしている4市と何とか関係を築くことができているかもしれませんが、4市どうしのつながりというのは、全くないです。こちらとしましては、HANDS プロジェクトというものが非常に参考になりまして、理想とするところであります。各市によりましては、学生派遣ということに関しましても非常に温度差があります。もう少しお互い理解できるようにきちんと説明をするといった丁寧な関係を築いていくことが大切だなと感じています（川口直巳さ

んからは、本誌において「愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルームの取り組み」を寄稿して

いただきましたので、あわせてご覧ください。

第3部 多言語による高校進学ガイダンスのあり方を考える

司会:原田 真理子(佐野市日本語教室指導助手・国際学部附属多文化公共圏センター研究員)

パネリスト:大根田佳夫(真岡市教育委員会指導主事)、萩原孝夫(大田原市教育委員会指導主事)

山本幸子(那須塩原市教育委員会指導主事)、田巻松雄(研究代表、国際学部教授)

HANDS プロジェクトではここ3年間、「多言語による高校進学ガイダンス」を継続して実施し、そのあり方については議論を重ねてきました。この事業の現状と課題について、幅広い立場でいろいろな方々の視点から議論し、問題点などを共有して、今後に生かしていければと思っております。「多言語による高校進学ガイダンス」を開催した、あるいは、開催予定の3つの市教育委員会のご担当者よりお話をいただきましたので、その一部を紹介いたします。

大根田: 11月4日に真岡市におきまして高校進学ガイダンスを実施しました。

周知対象者ですが、去年は、中学校の外国人が在籍している学校に通知をださせて希望をとりました。今年は、ちょっと広げまして、小学校にも配布しまして希望をとりました。

個人的に私が一番嬉しかったのは、休憩の時間等に父兄の方に呼び止められまして、「今日、本当にやってくれて良かったよ。今までわからなかったことが、わかって、本当に良かった」と言ってもらえたことです。

そして何よりもやってみて思ったのですが、ガイダンスの意義として、もちろん、進学についての情報を伝えるということで、一番の目的は、中学の3年生に対して情報を与えるということだったのですが、それ以上に私が思うには、小学生に通知を出してみたことで、急に準備をすると言ってもなかなか出来ないが、小学校の段階から、そういう情報を伝えられるということが出来たことで、意欲付け、将来について考えるいいきっかけになったんじゃないのかと感じました。

萩原: 2市1町、大田原市・那須塩原市・那須町に呼びかけをいたしまして、明日、大田原市におきまして、初めて進学ガイダンスを開催する運びになっております。現在、11家族の申し込みを受けているところです。今回のガイダンスは、まだ実施しておりませんが、課題としては、周知方法であったり、参加率をいかに上げていくかという点です。そのためには、開催の時期や場所ですが、大田原市内からですと端の方で行うものですから、もっと便利なところで開催して欲しかったという声を聞けたので、今後の検討課題です。開催時期もこの時期が良いのか、中学校3年生の3者懇談がすでに始まっている時期なのでもっと早い時期に、例えば夏休み前に行うべきなのかな、と思います。もう1点は、これをいかに継続していけるかと、継続していくための方策を考える必要があるのかと思います。通訳者や翻訳者の人材の確保ですとか、その人件費の件もクリアしていくことが今後の課題になるのかなと思います。

山本: 成果や課題については、お二人からお話がありましたので、もう少し広い角度から、中学生の高校進学ということについて、私なりに思っていることを少しお話しいたします。先ほどの第1部で宇大の学生さんたちが、実体験を通していろいろな壁を乗り越えて、ここまで歩んでこれたという姿を拝見しながら、とても嬉しく感じました。そして一番私の心の中に浮かんでいたのは、私の前を過ぎていったたくさんの方の外国人児童生徒の子どもたちでした。

ある男の子が言っていたことを思い出しました。小さいときに来たので、日本語も流暢で、学力もありましたし、英語も出来ました。でも彼がつぶやいていたのが、「先生、俺、大変なんだよ。日本語も